

### 13 半促成イチゴの遅植となる場合の技術対策

(園試 南部分場)

遅植は収量、品質が低下するが、次の事項を組合せれば増収を図ることができる。30g位の中苗を用い、芽仕立は主芽+腋芽1コ仕立とする。植付は苗床で腋芽が1コ確保できたら早い方が多収となる。根重確保のため2回の仮植とし、1回目は8月上旬、2回目仮植は9月20日前後に行う。10月下旬までに植付できる場合は1回でよい。冬枯れ防止に、12月10日頃にダイオシート又は黒寒冷紗2枚がけにする。定植には根ばちをつけ、10a当り12,000株の密植にすると増収する。

#### (1) 背景

半促成イチゴの定植時期は、秋の株の生育や、根の生育に関係し、収量品質に及ぼす影響が大きい。半促成イチゴの定植適期は、9月下旬(中苗~大苗使用)で収量、品質の最も高いことが明らかになっている。

しかし、稲刈り後の水田に新規に栽培するため遅植になるとか、イチゴの前作に野菜や花き作を取り入れたため遅植になるなど、事情によりやむを得ず遅植となり低収におちいつている例が少なくない。そこで遅植の増収を図るため、技術対策について検討した結果、次の事項が判明したので参考に供する。

#### (2) 技術内容

1) 遅植は適期植より収量、品質が低下するが、次の事項を総合的に組合せ増収を図る。

- (ア) 中苗(9月20日前後の時点で30gぐらい)を用い、芽仕立は主芽+腋芽1コ仕立とする。
- (イ) 植付時期は苗床で腋芽が1コ確保できたら、遅植であっても、できるだけ早目の方が収量が高い。
- (ウ) 遅植では、保温後の草丈、根の伸長が不良となるので、低温遭遇時間を適期植より多くして、保温開始する。(Y=1,500-x、Y=1,600-xあたり)  
例 ハウスビニールかけ5℃以下低温遭遇時間750時間  
トンネル保温5℃以下低温遭遇時間800時間
- (エ) 根重確保のため、2回の仮植とする。1回目の仮植8月上旬、2回目仮植9月20日前後に行う。  
10月下旬までに植付できる場合は、1回仮植でよい。
- (オ) 冬枯れ防止のため、12月10日頃から、ダイオシート又は黒寒冷紗2枚がけにする。
- (カ) 定植時、根ばちをつけて植える。
- (キ) 密植すると増収するので、10a当り12,000株にする。

2) 適応地域 県 下 一 円

(3) 指導上の留意点

1) 施肥は適期植よりやや少なめにする。

2) 1回目の仮植は18×18cm、2回目は20×20cmに広くする。

混み合わないよう適宜葉かきする。腋芽も必要数以上のものは、早めにかきとる。

3) 遅植の一型として利用できる作型に、株冷蔵栽培がある。2回仮植した苗を11月10日頃掘り上げ、約30日間冷蔵庫に0℃±1℃で冷蔵し、12月10日頃定植する。この栽培法は安定した技術であるが、開花期が早く厳寒期に当る。県内でも暖い地方では充分利用できる。

4) 連作が長くなると、遅植の場合、特に減収が大きくなるので2～3年で畑をかえるか、クロールピクリンによる土壌消毒を行う。

備考 (1) 計算式中のxは外部被覆(ハウスビニールかけ)時期までの5℃以下低温遭遇時間。Yは内部保温(トンネル)時期の5℃以下低温遭遇時間を表す。

(4) 試験成績の概要——(1)

1) 試験課題 半促成イチゴの定植時期試験

2) 試験年次および場所 昭和54年 岩手園試南部分場

3) 試験方法

(ア) 試験区

区番	定植時期
1	8月31日
2	9月10日
3	9月20日
4	9月30日
5	9月30日
6	10月15日
7	10月30日
8	11月15日
9	11月30日
10	12月15日

(イ) 1区面積および区制

1区22株 2区制

(ウ) 供試品種 ダナー

(エ) 耕種概要

○供試苗8月8日、本葉3枚で仮植したもの、9月20日現在で草丈20cm、葉数5枚、クラウンの太さ1.16cm、10本重290g

○施肥量(10a当) N 30.1kg、P 21.7kg、K 24.8kg

○栽植株数 畦幅135cm×株間18cm、条間35cm 2条植  
10a当り8,230株

○芽仕立 ⑤区は主芽+腋芽1コ、①～④、⑥～⑩区は主芽のみ。

○外部被覆12月24日(5℃以下低温量486時間)

内部保温 1月12日(5℃以下低温量768時間)

4) 試験結果

(ア) 年内の株の生育は植付の早い区ほど大で遅れるに従い不良となり、10月15日植区、10月30日植区が最も不良であった。遅い11月15日、11月30日、12月15日植区では、苗床で生育量を確保したものを持込んだため、株が比較的大であった。

(イ) 保温開始後の生育、定植時期の早い8月31日植は株疲れ傾向を示し、草高も低く、葉面積も小さかった。9月20日植区、9月30日植区、10月15日植区は草高20cmを越え、葉面積も64cm<sup>2</sup>以上で最も生育良好であった。11月15日以降の各区は茎数の生育が不良で、矮化に近い状態であった。

(ウ) 根の生育、早植の8月31日区および11月15日植区以降の遅い区は根重が小であった。

(エ) 収量・品質、9月20日植区と9月30日植区はa当り275kg、大果率も46%と最も高かった。10月30日植区以降の各区は低収で、遅植になるほど収量、大果率とも低下した。

以上から、半促成栽培の定植時期は、良苗(9月20日頃30g苗)使用で、9月20日~9月30日の間と考えられる。遅植の必要がある場合は、年内の株の生育確保、保温開始後の茎葉伸長と根量確保の対策が基本的事項と考えられる。

なお、遅植となる場合でも、できるだけ早く植える方がよいと思われる。

(5) 成果の具体的データ——(1)

表1 越冬前の生育

(2区平均)

区番	項目 区別	健全葉 枚数	最大葉			クラウン の太さ	腋芽 発生数	不時 出蕾
			葉身長	葉幅	葉身長 ×葉幅			
1	8月31日植付	4.3枚	6.3cm	5.7cm	35.9	2.80cm	8.2コ	14.5株
2	9月10日〃	4.5	6.3	5.3	33.4	2.70	5.9	14.5
3	9月20日〃	4.7	6.0	5.1	30.6	2.67	3.3	2
4	9月30日〃	4.2	5.5	4.8	26.4	2.64	3.5	1
5	9月30日〃	4.5	5.4	4.7	25.4	2.60	3.8	2
6	10月15日〃	3.6	5.1	4.4	22.4	2.42	4.4	0
7	10月30日〃	2.9	5.2	4.5	23.4	2.36	1.8	2
8	11月15日〃	3.1	5.4	4.9	26.5	2.41	2.2	3
9	11月30日〃	3.8	5.8	5.2	30.1	2.48	2.2	4
10	12月15日〃	4.1	6.2	5.5	34.1	2.59	4.0	0

(腋芽は定植後除去したもののみ、苗床で10月30日と11月12日除去したものは含んでいない)  
(新葉枚数、調査日に枯葉又は退色せず残っている葉数。調査12月25日)

表2 収穫期の生育

(調査5月17日 2区平均)

区番	項目 区別	草高	葉柄長	最大葉			根重	根茎重	根重 /根茎重
				葉身長	葉幅	葉身長 ×葉幅			
1	8月31日植付	16.3cm	11.4cm	7.9cm	7.4cm	58.5	47.7g	34.0g	1.4g
2	9月10日〃	19.4	13.7	8.3	7.7	63.9	54.5	33.9	1.6
3	9月20日〃	20.6	14.6	8.6	8.1	69.7	56.1	34.7	1.6
4	9月30日〃	19.6	13.9	8.2	7.9	64.8	56.7	31.6	1.8
5	9月30日〃	20.6	14.2	8.4	7.9	66.4	60.6	31.7	1.9
6	10月15日〃	22.7	16.0	8.8	8.4	73.9	63.5	30.0	2.1
7	10月30日〃	18.0	12.2	8.1	7.4	59.9	57.7	30.1	1.9
8	11月15日〃	16.6	11.6	7.7	7.3	56.2	50.7	28.9	1.8
9	11月30日〃	16.4	11.3	7.5	7.0	52.5	52.7	30.5	1.7
10	12月15日〃	15.4	10.7	7.5	6.9	51.8	50.8	29.7	1.7

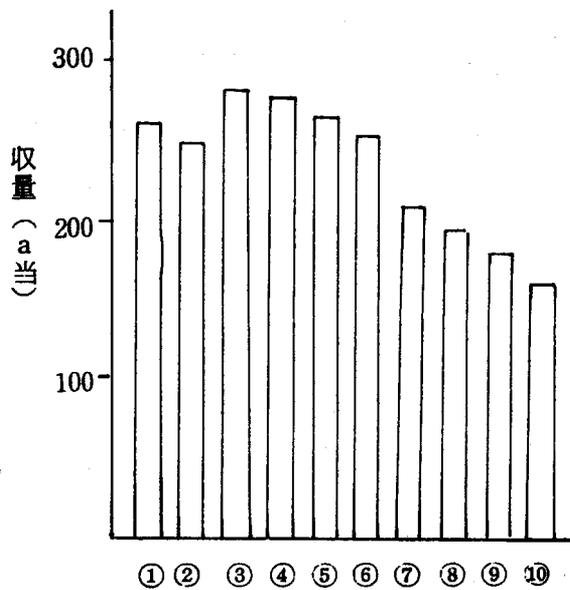


図1 収 量

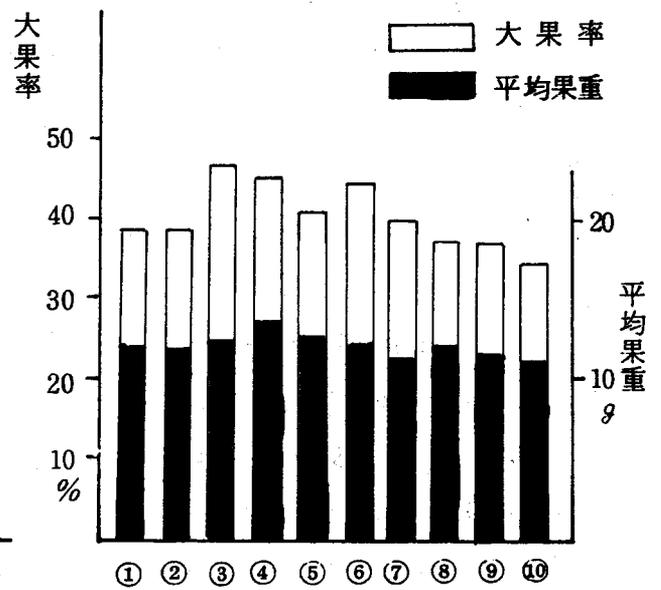


図2 大果率、平均果重

(4) 試験成績の概要——(2)

- 1) 試験課題 半促成イチゴの遅植栽培試験
- 2) 試験年次および場所 昭和51年 岩手園試南部分場
- 3) 試験方法

(ア) 試験区

区番	区名	供試苗	芽 (目標)
1	12月10日植(株冷) S	小苗	0
2	〃 M	中苗	1
3	〃 L	大苗	2
4	9月25日植(標準) S	小苗	0
5	〃 M	中苗	1
6	〃 L	大苗	2
7	10月30日植 S	小苗	0
8	〃 M	中苗	1
9	〃 L	大苗	2
10	12月10日植 S	小苗	0
11	〃 M	中苗	1
12	〃 L	大苗	2

(注) 小苗S 190g、中苗M 300g、大苗L 450g、いずれも9月25日時点の10本重。  
株冷区Sは入庫時調整重400g、Mは490g、Lは510g、いずれも10本重)

(イ) 1区面積および区制

1区20株 2.4m<sup>2</sup> 2区制

(ウ) 供試品種 ダナー

(ニ) 耕種概要

○施肥量(10a当)

元肥、堆肥5,000kg、ユーク2号190kg、  
加安44号80kg、みつかね80kg、  
炭カル80kg

追肥 くみあい液肥48kg

N 28.8kg、P 42.4kg、K 28.0kg

○栽植株数

畦幅120cm×株間20cm 2条

10a当り8,333株

○ 仮植回数

12月10日植（株冷）区2回、9月25日植、10月30日植、12月10日植区は1回

○ 被覆保温時期

株冷区は $0^{\circ}\text{C}\pm 1^{\circ}\text{C}$ に30日間株冷蔵後12月10日ハウス内定植、同時に保温開始。9月25日植および10月30日植は外部被覆、12月7日（ $5^{\circ}\text{C}$ 以下低温量422 h）、内部保温1月6日（ $5^{\circ}\text{C}$ 以下低温量898 h）。

12月10日植区は外部被覆、12月10日（ $5^{\circ}\text{C}$ 以下低温量470 h）、内部保温（ $5^{\circ}\text{C}$ 以下低温量907 h）

4) 試験結果

(ア) 年内の株の生育

9月25日植（標準）区が最も大きく、10月30日植区が最も小さく、12月10日植区が中間であった。苗の大きさ別では、 $S < M < L$ の順で、大苗ほど大株となった。

(イ) 保温開始後の生育

草高、葉柄長とも、9月25日植（標準）区よく、10月30日植区を、12月10日株冷区が次ぎ、12月10日植区が最も低かった。苗の大きさ別では $S < M < C a$ 順で大苗ほど草高が伸びる傾向を示した。

(ウ) 収量・品質

収量は9月25日植（標準）区が最も高く、株冷区、10月10日植区、12月10日植区には大差がみられなかった。

苗の大きさ別では、 $S < M < L$ の順であったが、M苗腋芽1個区とL苗芽2個区では収量差が少なく、大果重はM苗+腋芽1個区が多かった。

以上遅植する場合は、中苗（9月25日頃30gぐらい）を用い腋芽を1コ立てるのがよいと思われる。

(5) 成果の具体的データ —— (2)

表3 生育 (S51)

(10株平均)

区別	項目	越冬時調査 (12月10日)				収穫期調査 (5月17日)						
		生葉数	左の最大葉 葉身長×葉幅		クラウン の直径	芽数	草高	葉柄長	最大葉 葉身長×葉幅		花房 (1次)	花房 (2次)
		枚	cm	cm	cm	コ	cm	cm	cm	cm	本	本
1	12月10日植 S				1.50	0	17.6	13.6	9.2 × 7.9	2.8	3.9	
2	(株冷) M				1.63	0	19.6	16.3	9.5 × 8.6	3.2	4.2	
3	L				1.80	2	21.0	17.6	8.5 × 6.7	5.2	5.1	
4	9月25日植 S	3.3	5.1 × 4.2	1.62	0	20.5	16.5	7.7 × 7.3	3.0	4.1		
5	(標準) M	3.7	5.4 × 4.8	1.81	0.7	27.6	21.0	8.5 × 8.3	4.6	4.1		
6	L	3.9	5.7 × 4.9	1.97	2.2	25.6	20.2	8.1 × 7.7	6.2	4.4		
7	10月30日植 S	2.1	4.1 × 3.7	1.44	0	20.8	16.4	9.5 × 9.3	2.2	2.1		
8	M	2.3	5.3 × 4.9	1.81	0.7	20.9	15.3	9.3 × 8.6	3.7	2.7		
9	L	3.0	5.9 × 5.1	2.36	1.4	26.4	22.4	9.2 × 8.3	3.8	3.5		
10	12月10日植 S	2.7	5.0 × 4.7	1.73	0.3	15.9	12.3	7.4 × 6.7	2.3	3.4		
11	M	3.5	5.5 × 4.8	2.20	1.3	18.7	17.6	8.5 × 8.2	3.9	4.2		
12	L	4.2	6.1 × 5.2	2.52	3.1	19.1	15.3	8.2 × 7.1	4.1	3.7		

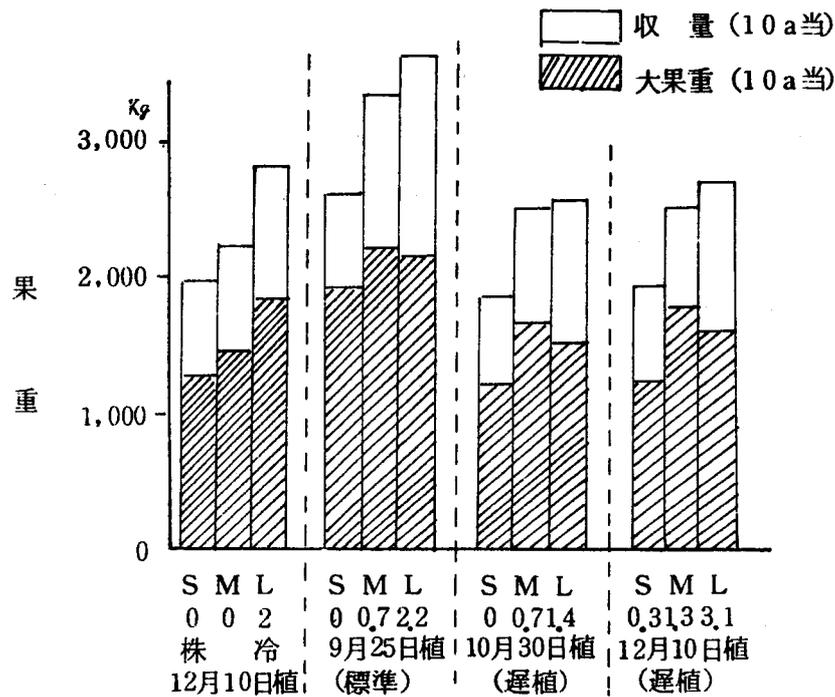


図3 半促成イチゴの遅植と収量、大果重 (S51)

(4) 試験成績の概要——(3)

- 1) 試験課題 半促成イチゴの遅植栽培試験
- 2) 試験年次および場所 昭和52 岩手園試南部分場
- 3) 試験方法

(ア) 試験区

区番	定植月日	根ばちの有無	仮植回数
1	9月25日(標)	有	1
2	12月10日(株冷)	無	2
3	12月10日(土なし)	無	1
4	〃(土つき)	有	1
5	12月25日(土なし)	無	1
6	〃(土つき)	有	1
7	12月10日(鉢上)	有	2

(鉢は径24cmのポリ鉢)

(イ) 一区面積および区制

1区22株 2区制

(ウ) 供試品種 ダナー

(エ) 耕種概要

○施肥量(10a当)

元肥(9月5日施肥)

緑肥4,000kg、ユーキ2号110kg、磷加安

44号80kg、みつかね100kg、炭カル

200kg

追肥 NK23号60kg、液肥20kg

N 35.8kg P 29.6kg K 33.8kg

○栽植株数

畦巾120cm×株間20cm 条間30cm 2条 10a当り8,333株

○供試苗の状況

仮植 2回仮植(株冷区と鉢上区) 1回目8月12日、2回目9月23日

1回仮植(標準区と12月10日植と12月25日植土なし、土つき各区) 8月12日

苗重 9月25日現在 10本重650gを各区使用

株冷苗 入庫時、未調整重10本重960g、クラウンの太さ1.9cm、調整後780g、クラ

ウン直径1.54cm

○芽仕立 保温開始前 主芽+腋芽1コに仕立

○被覆保温時期

株冷区は0℃±1℃に30日間株冷蔵後、12月10日ハウス内定植、同時に内部保温開始、12

月25日定植は、ハウス内に12月25日(5℃以下低温量601h)で定植、同時に内部保温開

始、12月10日定植はハウス内に12月10日(5℃以下低温遭遇量319時間)で定植。1月

1月11日5℃以下低温遭遇量811時間で内部保温開始。

4) 試験結果

- (ア) 収量の最も高いのは標準区(9月22日植区)で10a当り収量3,677kgであった。遅植の各区では株冷12月10日植区が10a当り3,311kg、次いで12月10日植(鉢上)が3,158kg、12

月10日植(土つき)区3,024 Kg、12月25日植(土つき)区2,882 Kgの順で、遅植各区の比較で

は、株冷区を除いては、土つきの各区が土なし各区よりも収量が高い傾向を示した。

(イ) 平均果重や大果率では、株冷(12月10日)植区が高く、次いで12月10日植の各区が高く、12月25日植の各区と9月25日植(標準)がやや低かった。

(ウ) 内部保温開始後の生育は、標準区、株冷区、鉢上区に比較して12月10日植各区、12月25日植の各区は草丈が低くなることと、土なしの各区にこの傾向の強くなることが観察された。

以上遅植の場合、根ばちをつけるとよく、また鉢上げまたはこれに順ずる2回仮植がよいと思われる。

(5) 成果の具体的データ——(3)

表4 越冬前の生育

(内部 保温開始前)

区 別	項 目	生葉数	左の最大葉		クラウン の直径	芽 数
			葉身長	葉 巾		
1	9月25日植(標準)	5.4 枚	5.6 cm	4.7 cm	2.15 cm	1
2	12月10日植(株冷蔵)	(4.2)	—	—	1.98 (1.54)	1
3	12月10日植(土なし)	4.5	6.3	5.0	2.18	1
4	12月10日植(土つき)	4.5	6.2	5.1	2.21	1
5	12月25日植(土なし)	4.4	5.4	4.5	1.96	1
6	12月25日植(土つき)	4.3	5.8	4.8	2.00	1
7	12月10日植(鉢上)	4.9	5.4	4.4	2.13	1

表5 収量・品質総括表 (S52)

区 別	平均果重		大果率		良果率	可 販 果 収量(10a当)	同 左 指 数
	可販果	全 果	可販果	全 果			
9月25日植(標準)	12.7 <sup>g</sup>	11.7 <sup>g</sup>	59.1 <sup>%</sup>	55.9 <sup>%</sup>	94.5 <sup>%</sup>	3.677 <sup>Kg</sup>	100
12月10日植(株冷)	13.9	12.9	69.1	66.1	95.7	3,311	90
12月10日植(土なし)	13.8	12.6	66.4	62.3	93.9	2,861	78
12月10日植(土つき)	13.4	12.3	65.9	62.6	95.1	3,024	82
12月25日植(土なし)	12.7	11.4	60.1	56.5	93.9	2,580	70
12月25日植(土つき)	12.3	11.1	61.3	57.6	94.0	2,882	78
12月10日植(鉢上)	13.5	12.7	63.2	60.7	96.1	3,158	86

(4) 試験成績の概要 — (4)

- 1) 試験課題 半促成イチゴの遅植栽培試験
- 2) 試験年次および場所 昭和53年 岩手園試南部分場
- 3) 試験方法

(ア) 試験区

区番	外部被覆時および内部保温開始時までにイチゴの受けた5℃以下低温遭遇時間	定植月日	外部被覆月日	内部保温月日
1	外 600h内 600hb=1,200	12月27日	12.27	12.27
2	〃 750 〃 750 b=1,500	1月 4日	1. 4	1. 4
3	〃 850 〃 850 b=1,700	1月10日	1.10	1.10
4	〃 1,100 〃 1,100 b=2,200	1月22日	1.22	1.22
5	〃 500 〃 800 b=1,300 標準期値	9月20日	12.21	1.10

(イ) 一区面積および区制

一区20株 2区制

(ロ) 供試品種 ダナー

(ハ) 耕種概要

○ 施肥料 (10a 当り)

元肥 (9月 日施肥)

堆肥 5,000 Kg

そさい有機P 282号

200 Kg

追肥 OKF-- 120 Kg

b は、y (外) = b - x (内)、b = x (外) + y (内)

(外) は外部被覆、(内) は内部保温

○ 栽植株数 畦幅 120 cm × 株間 20 cm 条間 30 cm 2条植 10a 当り 8,333株

○ 供試苗の状況 仮植 8月21日 15 cm × 15 cm にず、後 1列間引き、2列残しにした。

9月20日現在で 10本重 310 g、12月27日現在 10本重 650 g

○ 芽仕立 主芽 + 腋芽 1コ仕立

4) 試験結果

(ア) 内部保温後の茎葉の生育

遅植の各区①~④の比較してみぬと、収穫期の草高、葉柄長、葉の大きさとも、定植 = 内部保温開始時期が遅れるほど、つまり低温遭遇時間が多くなるほど、大きくなることが認められた。

しかし、標準区の b = 1,300 という低温遭遇水準の草高、葉柄長に、遅植では b = 1,500 の低温遭遇水準でも達せず、遅植 (12月植) の各区は9月植標準区より一般に草高が伸びない傾向がみられた。

(イ) 収量・品種

9月20日植標準 (b = 1,300) 区が最も高かった。遅植の各区では b = 1,200、b = 1,500、b = 1,700 の3区が、b = 2,200 の区より収量、大果重とも優れた。上記3区の中なかでは b = 1,500 区が収量が大きであった。

以上遅植の場合、適期植より、保温開始後草丈が伸びにくいので、低温遭遇時間を適期植より多く

与える。つまり保温開始時期を遅くする必要があり、1月上旬頃 (b=1,500 ぐらい) で保温開始する

とよいと思われる。

(5) 成果の具体的データ——(4)

表6 生育

(AB区各10株平均)

区 別	項 目	収穫期調査 (5月7日)				根 部 調 査				葉 色
		草高	葉柄 長	最 大 葉		根重	根茎 重	根 重 根茎重	根茎の 太 さ	
				葉身長	葉幅					
外( 600h)、内( 600h)b=1,200		20.2 <sup>cm</sup>	15.1 <sup>cm</sup>	9.4 <sup>cm</sup>	8.9 <sup>cm</sup>	7.19 <sup>g</sup>	3.32 <sup>g</sup>	2.17 <sup>g</sup>	1.42 <sup>cm</sup>	濃緑
〃( 750h)、〃( 750h)b=1,500		23.3	17.7	9.8	9.0	6.63	3.31	2.00	1.40	緑
〃( 850h)、〃( 850h)b=1,700		27.5	20.0	10.0	9.7	7.65	3.17	2.41	1.41	黄緑
〃(1,100h)、〃(1,100h)b=2,200		28.6	21.0	10.2	9.4	7.44	3.12	2.39	1.40	黄緑
〃( 500h)、〃( 800h)b=1,300		24.6	18.9	9.4	9.0	6.65	3.56	1.87	1.41	緑

表7 収量・品質

区 別	項 目	平均果重		大 果			良果率	10a 当換算 収 量	収量 指数
		可販売	全 果	大果重 (10株)	大果率 可販売	大果率 全 果			
外( 600h)、内( 600h)、b=1,200		13.8 <sup>g</sup>	11.6 <sup>g</sup>	2,115 <sup>g</sup>	63.9%	58.2%	91.0%	2,758 <sup>Kg</sup>	73
〃( 750h)、〃( 750h)、b=1,500		12.7	10.7	2,035	58.8	52.7	89.6	2,888	76
〃( 850h)、〃( 850h)、b=1,700		13.9	10.7	2,033	61.1	52.8	86.5	2,772	73
〃(1,100h)、〃(1,100h)、b=2,200		13.0	10.3	1,734	55.6	47.6	85.6	2,593	68
〃( 500h)、〃( 800h)、b=1,300		14.1	12.3	2,744	60.2	55.1	91.6	3,808	100

(4) 試験成績概要——(5)

- 1) 試験課題名 半促成イチゴの遅植栽培試験
- 2) 試験年次および場所 昭和55年 岩手園試南部分場
- 3) 試験方法

(ア) 試験区

区番	
1	9月20日植 8,000 株植
2	9月30日〃 8,000 〃
3	9月30日〃 12,000 〃
4	10月30日〃 8,000 〃
5	10月30日〃 12,000 〃
6	1月6日〃 8,000 〃 ダイオシート
7	1月6日〃 12,000 〃 〃
8	1月6日〃 8,000 〃 黒寒冷紗2枚
9	1月6日〃 12,000 〃 〃
10	1月6日〃 8,000 〃 無被覆
11	1月6日〃 12,000 〃 〃

⑥～⑨区を使用苗床のダイオシート、黒寒冷紗被覆は12月10日から定植まで冬枯れ防止

(イ) 一区面積および区制

1区22株 2区制

(ウ) 供試品種 ダナー

(エ) 耕種概要

○仮植 8月18日

○施肥

N 32.5 K<sub>p</sub> P 16.6 K<sub>p</sub> K 22.9 K<sub>p</sub>

○供試苗 9月20日現在

10本重 396 g

○畦幅 135 cm、条間 35 cm 2条植

○芽仕立 主芽1コ仕立

○保温被覆

①～⑤区 外部被覆12月25日、5a

以下低温遭遇時間 630 時間、内部保温5

℃以下低温遭遇時間 832 時間 1月6日⑥～⑪区、1月6日5℃以下895 時間で保温開始。

4) 試験結果

(ア) 年内の株の生育

定植時期の早い区が株が大きい傾向を示した。遅植の各区では、1月6日植、被覆区がやや小さい傾向を示した。健全葉数も同様の傾向であった。

(イ) 保温開始後の生育

9月30日植区、10月30日植区、9月20日植区が草高が高く、1月6日植の各区は低い傾向を示した。

1月6日植の各区では、草高がダイオシート>黒寒冷紗>無被覆の順であった。

(ウ) 根の生育

根重は9月30日植区が最も大きく、遅植になるに従い小さくなる傾向がみられた。

遅植の各区间では10月30日植>1月6日ダイオシート>1月6日黒寒冷紗>1月6日無被覆の順であった。

(4) 収量・品質

9月30日植が最も収量も高く、大果重も大であった。遅植の各区では10月30日植区が収量、大果重とも高く、1月6日植の各区ではダイオシート、黒寒冷紗で苗の冬枯れ防止した区が良く、無被覆区が最も不良であった。植付株数では、8,000株植より12,000株植の各区が収量が高く、10月30日植12,000株区は9月30日植、8,000株区より収量が高くなった。

以上から遅植の場合、密植12,000株植が有利であり、また苗床での冬枯れ防止するのがよいと思われる。また、遅植でも早目に植える方がよいことが再確認された。

(5) 成果の具体的データ——(5)

表8 越冬前の生育 (S55)

区番	項目 区別		健全葉	最大葉			クラウン の太さ	
				葉身長	葉幅	葉面積		
1	9月20日	8,000株	3.7	5.9	5.0	29.5	2.01	
2	9月30日	8,000〃	3.8	5.9	5.1	30.1	2.01	
3	〃	12,000〃	3.8	5.7	4.6	26.2	1.92	
4	10月30日	8,000〃	3.1	5.8	5.0	29.0	1.74	
5	〃	12,000〃	2.9	6.0	5.0	30.0	1.82	
6	1月6日	8,000〃	ダイオシート	2.8	5.6	4.7	26.3	1.64
7	〃	12,000〃	〃	3.0	6.0	4.9	29.4	1.75
8	1月6日	8,000〃	黒寒冷紗	3.2	5.7	4.8	27.4	1.83
9	〃	12,000〃	〃	3.1	5.9	5.7	33.6	1.71
10	1月6日	8,000〃	無被覆	2.4	4.7	3.9	18.4	1.65
11	〃	12,000〃	〃	2.5	4.7	3.9	18.3	1.68

表9 収穫期の生育 (S55)

区番	項目 区別		草高	葉柄長	最大葉			根重	
					葉身長	葉幅	葉面積		
1	9月20日	8,000	26.0	19.1	10.1	9.3	93.9	62.9	
2	9月30日	8,000	27.2	19.5	9.3	9.3	86.5	79.8	
3	〃	12,000	31.3	23.2	10.0	9.8	98.0	66.0	
4	10月30日	8,000	27.5	19.9	10.1	10.0	101.0	63.2	
5	〃	12,000	27.0	19.6	9.2	9.1	83.7	58.9	
6	1月6日	8,000	ダイオシート	25.5	18.8	9.6	9.2	88.3	66.3
7	〃	12,000	〃	28.6	20.7	9.3	9.1	84.6	49.8
8	1月6日	8,000	黒寒冷紗	24.1	17.5	8.9	8.5	75.7	57.1
9	〃	12,000	〃	24.6	17.5	8.5	8.4	71.4	50.7
10	1月6日	8,000	無被覆	23.4	17.5	8.8	8.7	76.6	48.1
11	〃	12,000	〃	23.0	17.3	8.3	8.1	67.2	42.3

表10 収量・品質 (S55)

区 番	項目 区別	可 販 果										計		肩果		果実総計		大 果 重	大 果 率	平 均 果 重	良 果 率	(a 当 量)	指 数		
		L		M		S		SS		A		B		個 数	重 量	個 数	重 量							個 数	重 量
		個 数	重 量					個 数	重 量	個 数	重 量														
1	9月20日 8,000	31	631	71	1,063	101	1,125	149	1,201	68	1,730	95	1,155	515	6,905	168	768	683	7,673	3,424	49.6	13.4	90.0	258.3	100
2	9月30日 8,000	45	895	71	1,085	103	1,162	151	1,232	73	1,914	77	990	520	7,278	141	694	661	7,972	3,894	53.5	14.0	91.3	727.2	105
3	9月30日12,000	31	610	72	155	93	1,042	129	1,053	61	1,553	63	791	449	6,209	121	766	570	6,975	3,318	53.4	13.8	89.0	338.6	131
4	10月30日 8,000	49	991	83	1,261	86	953	111	891	41	1,119	53	661	423	5,876	89	446	512	6,322	3,371	57.4	13.9	92.9	219.8	85
5	10月30日12,000	32	665	76	1,177	96	1,053	111	919	49	1,209	54	665	418	5,688	119	571	537	6,259	3,051	53.6	13.6	90.9	310.3	120
6	1月 6日 8,000 ダイオシート	30	620	56	828	75	826	134	1,020	35	867	49	599	379	4,760	166	720	545	5,480	2,315	48.6	12.6	86.9	178.1	69
7	1月 6日12,000 //	14	264	40	593	70	738	111	859	33	795	59	704	327	3,953	181	842	508	4,795	1,652	41.8	12.1	82.4	215.6	83
8	1月 6日 8,000 黒寒冷紗	20	406	49	726	76	853	127	978	40	985	64	759	376	4,707	152	688	528	5,395	2,117	45.0	12.5	87.2	176.1	68
9	1月 6日12,000 //	15	289	40	612	85	947	106	794	42	925	54	656	342	4,223	155	678	497	4,901	1,826	43.2	12.3	86.2	230.4	89
10	1月 6日 8,000 無被覆	22	450	45	667	83	942	118	909	37	955	52	629	357	4,552	151	729	508	5,281	2,072	45.5	12.8	86.2	170.3	66
11	1月 6日12,000 //	13	249	36	537	63	707	96	734	33	765	61	691	302	3,681	141	623	443	4,304	1,551	42.1	12.2	85.5	200.7	78

- 273 -

(6) 残された問題点

(7) 参 考 資 料 岩手園試南部分場成績書 (S51~ )